

# 土木學會誌

第 47 卷 第 1 号

## 目 次

年 頭 所 感 .....	永 田	年	1
会 告 .....			2
論 説			
道路交通今後の問題 .....	滝 山	養	6
解 説			
地すべりについて .....	小 出	博	12
最近の宅地開発事業について .....	広 瀬	可 一	20
寄 書			
電子計算機の企業における一応用例 .....	南 沢	宜 郎	28
資 料			
プレキャスト版合成術 .....	成 瀬	輝 男	34
話のひろば			
名誉員 青山 士氏をお訪ねして .....	高 橋	裕	36
水資源講座 4			
農業用水 .....	金 子	良	40
豆 知 識 ( 19 )	会 員 欄 ( 27 )		
書 評 ( 33 )	ロ ー タ リ ー ( 48 )		
論 文 紹 介 ( 50 )	文 献 抄 録 ( 54 )		
ニ ュ ー ス ( 62 )	学 会 記 事 ( 65 )		
編 集 後 記 ( 67 )	文 献 目 録 ( 69 )		

口 絵 写 真

広 告

### 表紙のことば

それぞれは、説明図でなく一般的イメージへの足がかりにすぎません。例えば、円弧と中央の白スペースの鋭い接触が、非常な精密さ、緊張感を、対称的な構成が、種々の要素の統合と、安定などを意味します。(S.M. デザイン・アソシエーツ 横溝敬三郎)

昭和 37 年 1 月

JOURNAL OF THE JAPAN SOCIETY OF CIVIL ENGINEERS.

VOL. 47, NO. 1, JAN. 1962

1-CHOME, YOTSUYA, SHINJUKU-KU, TOKYO, JAPAN

SYNOPSIS

FUTURE PROBLEM OF ROAD TRAFFIC

BY M. TAKIYAMA, C.E. MEMBER (Page 6)

In the present paper the various problems concerning the road and the automobile traffic are analyzed in the light of the principle of railway operation, a traffic organ, and the problematic points to be yet solved in future are described.

LANDSLIDE

BY H. KOIDE (Page 12)

The present paper deals with the phenomenon of landslide geologically, giving certain example's in Japan and oversea countries will cover the phenomenon generally.

RECENT RESIDENTIAL LOT DEVELOPMENT UNDERTAKING

BY Y. HIROSE, C.E. MEMBER (Page 20)

The present paper describes the actual result of the undertaking of developing the collective housing area and the collective industrial area which has been carried out by Japan Housing Corporation since 1955 and its effect as well as the role to be played by the Corporation. It also describes how the local public body is making a precautonal arrangement of city area at present and lastly as a means of developing the residential lot how important the land readjustment is.

昭和 36 年度土木学会誌編集委員

委員長	齋藤	義勝	治人	副委員長	堀島	毅淳	加藤	信一	夫成
委員	井前	山祐	一之	伊藤	江相	良正	佐藤	藤田	生雄
	嶋田	祐俊	策夫	梅野	中川	川茂	永針	谷門	哲男
	西浦	本誠	安夫	林田	森部	岩部	山治	掛山	明哲
地方委員	岸元	北重	海臣	横戸	松本	順一	幹事	幹事	幹事
	岡田	新三	三次	(北海道支部)	岩崎	藤富	夫雄	(東北支部)	(東北支部)
	増田	俊次	(中部支部)	(中部支部)	伊岡	荒木	正夫	(関西支部)	(関西支部)
	渡南		(中四支部)	(中四支部)	高橋	健二	(西部支部)	(西部支部)	(西部支部)

## 奥只見ダム

奥只見発電所は只見川と北の岐川との合流点須原口下流 1.5 km の地点に直線重力式コンクリートダムを築造し、ダム直下流右岸に設ける地下発電所で発電し、延長 2.9 km の放水路から放流する計画で、ダムの高さ 157 m、体積 163 万 m<sup>3</sup> 総貯水量 6 億 t、最大発電力 36 万 kW、わが国最大の規模を誇るコンクリートダムであるが、付近一帯は本邦屈指の豪雪地帯のため非常な難工事であった。

36 年 12 月、ダムコンクリートの打設を終了し、本工事は完成した。

企業者：電源開発株式会社	ダム堤長：475 m
施工：鹿島建設株式会社	ダム体積：1 630 000 m <sup>3</sup>
工期：昭和 32 年 5 月～36 年 12 月	有効貯水量：458 000 000 m <sup>3</sup>
ダム型式：直線重力式コンクリートダム	最大出力：360 000 kW
ダム高：157 m	

鹿島建設株式会社の御協力により新年号の口絵をカラーで飾ることができました。このページの利用についての問い合わせは、土木学会編集部（351-5138）へお願い致します。

## 東海発電所冷却用水路工事

原子力発電株式会社が茨城県東海村に建設中の、わが国最初の原子力発電所復水器冷却用水路は、同発電所付近を流れる久慈川の流量が所要水量 14 t/sec にみたないため、外海から直接取水する画期的な計画である。東海村海岸は直接外洋に面し、波浪荒く、かつ漂砂の移動による海底変化が激しいので、取水口は海底変化や漂砂の影響をさけて、汀線より 500 m の沖合、水深 8 m の地点を選び内径 2.5 m の鋼管 2 連を海底に沈設し、陸部水路に定着して取水する。陸部水路 370 m は底版、側壁完了後、上記鋼管水路の継手溶接のため、ドライドックとして使用し、鋼管を突き出したのちに隔壁、床版コンクリートを打設し、導水路放水路を完成する。本工事の最大難関は、鋼管の曳航沈設ならびに、これに先立つ海底掘削にあり、綿密な計画実験のもとに着々工事を進めている。鋼管の沈設は海上、気象状況を考慮し、本年 6 月頃を予定している。本工事の完成（38 年 5 月予定）は、従来困難と考えられていた外海からの直接取水の可能性を立証し、今後の臨海発電所の敷地選定に重要な役割を果たすものとして注目されている。

企業者：日本原子力発電株式会社
施工：鹿島建設株式会社